様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２８６６

研究課題名（和文）レジリエンス向上を目的とする地域と連携したキャリア教育プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）life-career resilience, high school students

研究代表者
荒木　淳子（Araki, Junko）

明治大学・政治経済学部・専任准教授

研究者番号：５０４４７４５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は日本の高校生を対象に、不確実な状況や思うようにならない状況の中でもキャリア形成を行うための力として、ライフキャリア・レジリエンスに着目し、ライフキャリア・レジリエンスを高めるための探究型教育プログラムを開発しようとするものである。
　まずはWEBアンケート調査を実施し、大学生1, 2年生に対して、高校時代の探究型授業経験やそこでの探究経験と、大学でのキャリア探索行動との関連を探った。その結果、ライフキャリア・レジリエンスには変化が見られなかったものの、高校での深い探究学習経験は、大学でのキャリア探索行動と関連していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本では2018年に高等学校の学習指導要領が改訂され、それまでの「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」となるなど、探究学習の重要性が指摘されている。しかし探究学習の効果については十分研究がなされておらず、探究学習がその後のキャリア探索にどのように関わっているかはまだ明らかにされていない。本研究はWEBアンケート調査より、高校での探究学習経験と大学でのキャリア探索との関連について分析し、探究学習経験がその後の生徒のキャリア探索に影響を与えることを明らかにした点に学術的、社会的意義がある。今後は高校から大学までの追跡調査を行う等、探究学習経験の効果をより具体的に明らかにする必要がある。

研究成果の概要（英文）：　This study focused on life career resilience as the ability to develop a career in uncertain and unpredictable circumstances, and attempted to develop an inquiry-based education programme to enhance life career resilience among Japanese high school students.
　A web-based questionnaire survey was therefore conducted to explore the relationship between the first and second year university students' experiences of inquiry-based classes in high school and their exploratory experiences there, and their career exploration behaviour at university. The results showed that, although no change in life career resilience was observed, in-depth inquiry-based learning experiences in high school were associated with career exploration behaviour in university.

研究分野：教育工学

キーワード：探究学習　キャリア探索　深い探究　ライフキャリア・レジリエンス　授業プロセス・パフォーマンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では、若年層の就職難が社会的問題となった 1990 年代以降、若者に対するキャリア教育の必要性が指摘され「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す」ためのキャリア教育が、学校教育に求められるようになった。文部科学省高等学校教育部会は「社会・職業への円滑な移行に必要な力・市民性」を高等学校までの教育で修得すべき「コア」の力と定め、「総合的な探究の時間」において「自己の在り方生き方を考えながら，よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること」が目指されるなど、高等学校におけるキャリア教育では、多様化・複雑化する社会の中で主体的に学び続けるための力や広く地域・社会に開かれた学びが求められている。

しかし高校卒業者への調査では、高校生のときに取り組んでおきたかった学習内容として、「就職後の離職・失業など，将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応についての学習」が挙げられるなど、不確実な社会で生き抜くための力を高校で十分学ぶことができていない。このため今後は、高校でのライフキャリア・レジリエンスに関する教育の実施が望まれる。

２．研究の目的

本研究の目的は、高等学校において地域と学校とが連携し、生徒のライフキャリア・レジリエンスの向上を目的として行うキャリア教育プログラムを開発し、その評価を行うことである。

本研究の学術的独自性は、①ライフキャリア・レジリエンスの観点から、参与観察や質的・量的調査研究を通じて地域と学校が連携したキャリア教育プログラムの効果を学術的に明らかにしようとする点、②①を踏まえ、ライフキャリア・レジリエンスの向上を目的とする学校と地域が連携したキャリア教育プログラムを開発し、その効果を評価する点である。

①については、地域と学校が連携したキャリア教育プログラムは数多く実践されてきているが、その多くは事例報告に留まり、その効果を学術的に明らかにした研究はほとんどない。②については、これまでにもレジリエンスの支援プログラムが作られてきたが、それらは主に子どもを対象とするものである。高校のキャリア教育プログラムとして開発されたものもあるが、それらは教員が一人で行うものであり、外部の支援が課題であった。そこで本研究では、高校生のライフキャリア・レジリエンス向上を目的とし、学校と地域が連携した教育プログラムを開発しその効果を学術的に評価することを目的とする。

３．研究の方法

当初は協力校において地域と学校とが連携して実施されているキャリア教育プログラムについてフィールドワークを実施し、参加している高校生にアンケート及びインタビュー調査を実施し、ライフキャリア・レジリエンスとの関連について明らかにする予定であった。

しかし 2020 年からのコロナ禍での行動制限によりフィールドワークを実施することは難しくなった。そこで 2022 年 11 月に WEB アンケート調査を実施し、高校時代の探究学習経験と大学でのキャリア探索行動との関連を分析した。高校時代の探究学習の卒業後の効果を測るためには、実際に探究学習を行っている協力校において探究学習を実施する前後と卒業後とを縦断的に比較調査することがもっとも適している。しかし本研究ではそうした高校の協力を得ることができなかったため、アンケートでは大学生に高校時代の経験を振り返って回答してもらうこととした。分析には、ライフキャリア・レジリエンス尺度（高橋ほか 2015）のほか、キャリア探索尺度（安達 2008）、授業プロセス・パフォーマンス尺度（畑野 2011）を用いた。

また、2023 年 3 月にストーリー・テリングを支援原理とするライフキャリア・レジリエンスを向上させるワークショップを開発し、神奈川県立 A 高校において試行実践を行った。

４．研究成果

（１）Web アンケート調査について

株式会社インテージに依頼し、2022 年 11 月に大学１，２年生を対象に Web アンケート調査を行った。学習内容が将来の職業に直結しやすい４年制の医療系（薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など）と６年制の医療系（医学・歯学・薬学など）を除く４年制大学に通う全国の大学生を対象とした。

調査の結果、全国の大学で学ぶ大学生 326 名から回答が得られた。データクリーニング後、４年制大学に所属する 291 名を対象に分析を行った。回答者は男性 92 名（31.68%）、女性 199 名（68.4%）、大学１年生 128 名（44.0%）、大学２年生 163 名（56.0%）であった。学部は人文科学系 92 名（33.6%）、社会科学系 105 名（36.1%）、理科系 62 名（21.3%）、芸術系 13 名（4.5%）、文理融合学部 10 名（3.4%）、その他９名（3.1%）であった。出身高校は、普通科が 271 名（93.1%）、専門学科が４名（1.3%）、総合学科が 16 名（5.5%）であった。

高校で経験した探究型授業ごとに大学でのキャリア探索行動を比較したところ、環境探索では、SGH（スーパーグローバルハイスクール）と SSH（スーパーサイエンスハイスクール）に関する授業をいずれも経験した群のみ得点が有意に高く、他の探究型授業経験群や，探究型授業経験

なし群との間に有意な差はなかった。また自己探索では、その他の探究型授業を経験した群と、SGH、SSH ともに経験した群が、探究型授業の経験ない群よりも有意に得点が高かった。SGH と SSH をともに経験した群とその他の探究型授業経験群に限定されるが、このように分析では、高校での探究型授業の経験がキャリア探索と有意に関連することが示唆された。一方、ライフキャリア・レジリエンス、授業プロセス・パフォーマンスについては、高校時代に探究型授業を経験したかどうかによる差は見られなかった。これは，ライフキャリア・レジリエンスのようなスキル・態度の獲得や大学で主体的に学びに関わろうとする姿勢には、高校時代の探究型授業経験だけではなく、友人関係や家庭環境、地域活動など学校外での経験や、将来の目標の有無、大学での学習環境といった多様な要因が影響するためではないかと考えられる。

また、高校時代に探究型授業を経験したことのある回答者のうち、欠損を除く 204 名を対象に分析を行ったところ、ライフキャリア・レジリエンスが深い探究経験、キャリア探索との関連を媒介する効果については、深い探究経験は環境探索、自己探索と有意に関連するものの、ライフキャリア・レジリエンスの媒介効果については、ライフキャリア・レジリセンスの下位尺度である継続的対処が深い探究経験と環境探索との関連を、同じく下位尺度である現実受容が深い探究経験と自己探索との関連を部分媒介しているだけであった。全体としては、深い探究経験はキャリア探索を促すが、それは深い探究経験によってライフキャリア・レジリエンスが高まるからというよりも、深い探究経験を通じて活動性や将来へのキャリア意識が高まる（溝上ほか 2015）ためではないかと考えられる。

探究型授業の中でビジネス課題や社会課題、あるいは自ら立てた「問い」について試行錯誤しながら問題解決をはかるといった深い探究を経験することは、自らを取り巻く社会への関心を高め、環境に継続的に対処しようとする姿勢や考え方を培うこととなり、それが大学でも自分の将来の職業に向けて積極的な情報収集を行おうとする環境探索につながるのではないかと考えられる。一方で、探究活動の中で現実に合わせて目標を下げるなど、現実を受容する姿勢が強まることは望ましいことであるものの、自分の長所や短所について考えてみる、これからの自分の生き方について想像してみるといった自己探索とは負の関連を持つことには留意すべきである。

（２）ワークショップ開発について

ストーリー・テリングを支援原理とするワークショップ開発を行った。ワークショップで用いるため、大学の文系学部を卒業した社会人 4 名に大学入学からこれまでのキャリアについてインタビューを実施し、インタビュー記事を作成した。インタビュー記事では、これまでのキャリアでは思うようになることばかりではなかったこと、それでもその経験を乗り越えることで満足のいくキャリア選択ができたことなどをストーリーとしてまとめた。

ワークショップは、2023 年 3 月に神奈川県立高校で 9 名の高校生を対象に行った。ワークショップではグループに分かれてインタビュー記事を読み込んだ後、インタビュー記事の先輩たちのキャリアにおいてどのような困難があり、それをどう乗り越えたかを話し合った。その後は、話し合った内容をもとに、各自が大学卒業時の自分を想像しながらストーリー・テリングを行った。ワークショップの事前事後にライフキャリア・レジリエンス等のアンケートを実施したが、回答に欠損がみられるなど分析に十分ではなかったため、本ワークショップがライフキャリア・レジリエンス向上に効果があったかどうかは、評価することができなかった。しかし、ワークショップ後のインタビューでは、今、社会で活躍している先輩達も紆余曲折を経ていることを知り、自分も失敗を恐れずに挑戦していきたい等の発話も見られた。コロナ禍での行動制限のため、なかなかワークショップを実施することができなかったが、今後は、試行実践の結果を踏まえ、プログラムを改善した上で本実践を行い、効果の評価を行いたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 荒木淳子・高橋薫・佐藤朝美	４．巻 48巻第2号
２．論文標題 高等学校における探究学習の経験と 大学での学び・キャリア探索との関連	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本教育工学論文誌	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 荒木淳子・佐藤朝美・高橋薫
２．発表標題 普通科高校生の進学を支援する キャリア・ワークショップの開発と評価 －キャリアレジリエンス能力の向上に着目して－
３．学会等名 日本教育工学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高橋　美保 (Takahashi Miho) (10549281)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授 (12601)	
研究分担者	佐藤　朝美 (Sato Tomomi) (70568724)	愛知淑徳大学・人間情報学部・教授 (33921)	
研究分担者	高橋　薫 (Takahashi Kaoru) (70597195)	創価大学・公私立大学の部局等・准教授 (32690)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関